



1964-2020 東京オリンピックと山に還る日

上垣喜寛 / うえがき・よしひろ
ジャーナリスト、TPPに反対する人々の運動事務局

紀 伊半島の北西に流れる紀ノ川。その支流の山村で祖父母は暮らしていました。1964年、東京オリンピックの時に彼らは4人の子どもとともに山を下り、大阪南部で製菓業を営むことになりました。家をあげて村を離れる、まさに「挙家離村」であり、一次産業から二次産業への大転換だったといえます。

山や木の価値が大きく変化していった時代のようなのです。1951年に丸太(皮をはいた材木)の関税がゼロになり、外国から木材がドッと入り、55年に約94%だった木材の自給率はみるみる下落。69年には外材の供給が国産材の供給を上回りました。

幼少期から「あれはお前の山やぞ」と祖父から言われてきた私は、どうにか先祖の山を引き継ぎ、林業を中心に山村暮らしをできないものかと考えてきました。とはいえず山村は高齢化が進み、雇用がないというのが「常識」です。そして、日本林政は、「林業は衰退している」「不在地主」という「常識」を盾に、少ない人数で効率的に大規模に……と土地を集約し、

地表むき出しの幅広い林道に数千万円の大型機械を通すような林業を進め、数年前からその動きを加速させています。

さて、そんな「常識」を覆す活動が高知県にありました。「土佐の森・救援隊」というNPOが進める「自伐林業」は、山を持つ人が自らチェーンソーを持ち、軽トラが通れる程度の林道をつくって木を伐り出すような小規模林業です。日本林政とは180度逆の発想。この方法は、全国40カ所以上で広がり、特に東日本大震災以降の三陸沿岸部では、それまでチェーンソーを握ったことのない人たちが作業し、木材を立派に出荷し始めています。私は今、そのNPOや研究者らとともに自伐林業を志す人たちに応援する組織をつくらうと準備会を立ち上げています。

7年後の2020年、私は祖父が山を下りた時と同じ37歳になります。偶然にも、同じ年に東京オリンピックが開催されるようです。祖父は山を下りたけれど、私は山に戻れるように活動していきたいなど思っています。■

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 22 2013.11.01

02	Relay Essay ポコポコ② 1964-2020 東京オリンピックと山に還る日◎上垣喜寛
03	【特集①】遺伝子組み換え作物の生産現場で何がおこっているのか? — ラテンアメリカの農村から◎印鑰智哉
8	【特集②】変貌する世界と民衆交易が切りひらく未来② 創発的自治的な協同性に立ち戻る◎多々良 哲 未来は、小さな地域の自立圏構想にある◎山本伸司 この世界をもっと平等にしよう◎アルネル・リガボン
10	【Column】 Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記④ パパア人の時間◎津留歴子 マイストーリー in ジャパン⑩ 【中国】楊志輝 微笑みの国から④ 地域の人、その人の仕事◎平河 夏 アジア現代文学あれこれ④ 『天国の風—アジア短篇ベスト・セレクション』◎秋山真児
12	撮っておきアジア⑫ 番外編 タイ◎押山正紀
13	APLA食堂② バナナカレー◎赤石優衣、大久保ふみ、廣瀬康代
14	【Voice from APLA partners】 【東ティモールより】アグロフォレストリーの導入に向けて 【ネグロスより】グリーンコープ青少年ネグロス体験ツアーを実施!
15	事務局だより

表紙のことば

ラフ族は中国で公式に認定された少数民族で、雲南省に約45万人が暮らしている。雲南省の南に位置する北タイでも10万人、ビルマにも15万人暮らしているという。1960~70年代にラオスに侵攻したベトナムと戦ったラフ族は、のちに難民として米国に渡った。彼らはその衣装や方言によって黒ラフ、赤ラフ、黄ラフなどと、細かなサブグループに分類される。精霊を信仰していたが、タイのラフ族の中にはキリスト教に改宗したり、伝統的な焼畑農業を放棄し、タイの都市部に移動してきたグループもある。表紙の様子は、国境を越えて、あるいは時代の変化とともに生活様式を変えていったラフ族のアイデンティティをつなぐ象徴である。(堀 芳枝)

特集 1

遺伝子組み換え作物の生産現場で何がおこっているのか?

— ラテンアメリカの農村から

印鑰智哉 / いんやく・ともや
（旧）オルタナティブ・トレード・ジャパン 政策室長

世界中で遺伝子組み換えに対する抗議が高まっている。しかし、世界で遺伝子組み換え作物の耕作はわずか12%の農地を占めるに過ぎない。それなのになぜこれほど大きな問題になるのか?

大豆とトウモロコシは耕地面積当たり高いタンパク質を生み、家畜の飼料として最高の価値を持つ。最近ではバイオ燃料の原料としても重要となり、戦略物資となっている。その生産の約8割が南北米大陸に集中し、ほとんどがモンサント社などの遺伝子組み換えの種子になってしまっている。その結果、世界の食肉・加工食品産業が米大陸産の大豆・トウモロコシに依存する構造が生まれている。

さらに、この遺伝子組み換えの農業モデルは小農民の家族農業を圧殺し、危険な農業の大噴霧により環境を破壊している。一方で、このモデルに対するオルタナティブがラテンアメリカに生まれ、大きな潮流になりつつある。それがアグロエコロジーである。(編集部)

ブラジル農民の警告

「日本が輸入しているブラジルの遺伝子組み換え大豆、あれは毒そのものだよ」とネリオさんは警告した。彼は、ボリビア国境に近いブラジル・マトグロッソ州で、

土地なし農村労働者たちを率いて、座り込みの闘争から農地改革を勝ち取り、今は市議会議員となつている農民運動のリーダーだ。彼らの土地は広大な放牧地を有する大地主のものだった。しかし、その粗放な放牧地は荒廃し、

土地は砂地化していた。ブラジルでは農業生産をしていない土地は農地改革の対象となる。しかし、大地主の力の強い政府、州政府の下で進まない農地改革に対して、土地なし農村労働者運動(MST)は

を張り、その土地の農地改革を訴え続けている。武装した自警団に襲われる事件も度々起きる。しかし、その土地の生産性がないことが認められれば農地改革が実行される。MSTはこれまで多くの農地改革の実績を上げてきた。20



遺伝子組み換えトウモロコシへの農業空中散布。(ブラジル)

02年、ネリオさんたちもこうして実力で農地を得た。砂地化していた土地は生態系を守る農業、アグロエコロジーの実践により、回復し、私が訪れた農地はすでに緑豊かな大地に変わっていた。しかし、彼らのその豊かな楽園も周りは大地主のモノカルチャーに囲まれている。農業の空

中散布により、彼らの農地にも農薬が飛散し、作物は枯れ、健康被害が懸念されている。彼の警告はその体験ゆえ、力がある。
遺伝子組み換え企業による支配
ブラジルは2003年に遺伝子組み換えを一部合法化した後、(2005年に全面合法化) 遺伝子組み

農業散布に抗議するブラジル農民。「農業が自然、民衆、私たちの未来を殺す」。



換え大豆の耕作が急増した。それと共に激増したのがモンサント社製ラウンドアップなどの農薬である。今やブラジルは世界一の農薬使用国になってしまった。今後予想されるのは、現在発表されている種類よりさらに有害性が懸念される遺伝子組み換えの登場である。モンサント社と同じ米国の遺伝子組み換え企業ダウ・ケミカル社が作った枯れ葉剤耐性大豆やモンサ



「土地はいのち」。300家族が立ち退かされ、家も壊された。(アルゼンチン)



大豆プランテーション導入で立ち退きを迫られる先住民カイトワの人びと。(ブラジル、マトグロッソ州)

ト社のジカンバ耐性大豆などである。そもそも遺伝子組み換えは農薬を減らすメリットがあると宣伝されていた。しかし、現実には農薬は激増し、近年では農薬を何度使っても枯れない雑草が多くの農地に出現している。その結果、ベトナム戦争で使われた枯れ葉剤やジカンバなどの危険な農薬がさらに必要とされるようになってきているのだ。
枯れ葉剤耐性大豆が導入されると、大地に大量の枯れ葉剤が撒かれることになる。米国ではベトナム戦争のような事態を国内で引き起こすことに対して大きな反対運動が起きたことで、まだ承認はされていないが、近い将来、南米で導入される可能性が強くなってき

た。そうなれば、日本にもこうした毒性の強い大豆の一部がやってくることになる。日本政府は、枯れ葉剤耐性遺伝子組み換え大豆をどっくに承認済みだからだ。
自由貿易交渉を通じた農業支配
現在、ラテンアメリカやアフリカの諸国は、自由貿易交渉を通じて、多国籍企業による農業支配が可能となる種子法の改悪を強要されている。コロンビアもそのひとつの国だ。コロンビア政府は、多くの農民が実施してきた自分たちの種子を保存して翌年に撒くという従来の農業実践を犯罪行為として、種子を種子企業から買わなければならないという種子法改革を実行した。種子企業といっても多くは

モンサント社などが買収している。このため、結局、農民たちはモンサント社などから種子を買わなければならない。これに怒った農民たちはコロンビアの国道を封鎖し、大きな抗議行動を起こした。遺伝子組み換え企業による支配、食料主権の崩壊をもたらす政策には国中の学生や労働者も呼応して、国を挙げた大抗議行動となり、ついにコロンビア政府はこの改悪種子法の施行の2年間の凍結を宣言せざるをえない事態に追い込まれた。

70年代以来、ラテンアメリカの研究者たちが先住民や伝統的住民の農業実践の中に画期的な知恵や方法を見出し、古代農法の優れた点も再発見された。その成果が、アグリビジネス・大地主と闘う小農民たちの運動と結びつき、科学・社会運動として様々な階層を巻き込んだ大きな流れを作った。特に2000年以降は、Via Campesina「農民の道」世界9ヶ国、148の農民組織で構成という国際的な小農民連帯運動を通じて、南米中に広がっている。アグロエコロジー

はベネズエラやブラジル政府の政策にも取り入れられた。南米の大学では専門コースが設定されたところも少なくなく、多くの学生が学んでいる。
アグロエコロジーとは単に農法・技術をさすものではない。社会や自然のシステムを有機的に捉え、経済的にも地域自立が実現可能なシステムを作り出そうとする運動であり、科学である。その農業実践は生物多様性を生かし、農業や化学肥料などを使わない有機農業と基本的に通底しているが、アグロエコロジーで重視されるのは農業実践だけでなく、農業のあり方であり、社会のあり方である。食料主権や農地改革は常にその中心課題にある。

例えば、ブラジルではこの運動により、農民の種子の権利が確保された。ブラジルの種子法では遺伝子組み換え企業の特許が認められている一方、先住民や小農民が自分たちの種子を保存し、交換したりする権利が保障されている。干ばつや病虫害による作物全減

などのリスクを減らすために、多様な種子を持つことは先住民にとっても重要な実践で、古くから種子を互いに交換し、多様な種子が保たれてきた。この権利が奪われることで企業支配の面だけでなく、農業の生物多様性が失われ、今後の気候変動に対しても危険な状態に農民が曝されてしまう可能性もある。この権利の確保はアグロエコロジーの基礎となる。
左派政権として注目されているブラジルの労働者党政権だが、遺伝子組み換え企業をはじめとするアグリビジネスに買収され、実際にはアグリビジネスを利する政策を続けてきた。そのなかでアグロエコロジーの運動は確実に全国の小農民に根を張り、支持者を増やし、政府としても無視できない勢力に成長した。2012年にはアグロエコロジーを政策として採用するに至っている。そして他のラテンアメリカ諸国やアフリカでもそうした動きは始まっている。
今後のアグリビジネスとの闘いや国際民衆連帯を考えるうえでこのアグロエコロジーは避けては通れない重要な動きになってきたと言えるだろう。■

ラテンアメリカで大きな流れをつくるアグロエコロジー

モンサント社をはじめとするバイオテクノロジー企業や穀物メジャーと寡占地主が組んで、巨大な遺伝子組み換えモノカルチャーが中南米で生み出された。アルゼンチンやパラグアイでは全農地の6割前後が遺伝子組み換え大豆のモノカルチャーに占拠されている。こうした多国籍企業による露骨な支配に対して、ラテンアメリカではオルタナティブな動きが生み出されてきている。それがアグロエコロジーである。



「食料主権」を通して農業のあり方を問う。

石巻でバルシステムと共に炊き出し活動。(2011年4月1日)



持っていることがストレートに伝わってききました。私は羨ましいと思いましたが、これが協同組合の原点だな！と思ってしまいました。この、ネグロスの人びとが育ててきた協同性こそが、ネグロスと私たちが対等の関係を結んでいける

土台になってるなと思いましたが、「私買って食べる人・あなた作って売る人」である以上、生協と産地は絶対に「非対称」ですが、それでも「対等」であろうとすれば、自分らの協同の契機を相手の協同の中に見出す相互性が不可欠であ

特集 2

変貌する世界と民衆交易が切りひらく未来②

本誌前号にひきつづき、今号では「民衆交易」の意義を、世界経済そして福島をめぐる状況を踏まえて、生活協同組合の現場を率いる立場のお二人から、その経験と提言を寄せていただいた。さらにネグロス島のオルスター・トレード社(ATC)創設期から活動に関わってきたマスコバド製糖工場長からの発言もあわせてお届けする。(編集部)

3

・11大震災の後、被災地の人ひとが礼節を保ち、分け合い、助け合い、支え合う姿が世界から賞賛されました。例えば、あいコープは、震災後の数週間、全国の友好生協や生産者が送り込んでくれた支援物資を組合員宅や避難所に配ることに専念したのですが、組合員たちは受け取った支援物資を(お年寄りや小さな子どもがいるなど)自分より困っている(近所にさらに配った)というのです。戻ってきた職員

報告を聞いて私は驚き感動しました。だって全て閉まったスーパーやコンビニはいつ開くかもわからず、貰った食料を自分の家族のために確保しても誰も責められない状況だったのですから。



創発的自治的な協同性に立ち戻る

多々良 哲 / たたら・さとし
生活協同組合あいコープみやぎ 専務理事

しかしそのような「災害ユートピア」被災地に生まれた創発的自治的なコミュニティは、店が開きライフラインが通り余震が少し治まると徐々に解消していきました。やがてマスコミによる「つながろう」「がんばろうニッポン！」の大合唱。時の首相まで「絆」と言い出し、上からの「共同性」ニナシヨナリズムのほうへ回収されていったので



「さよなら原発集会」に参加。(2012年3月24日)

協同組合とは、このような人ひとの創発的自治的な協同性(それはその本性上「短命」である)をなんとか持続しよう、固定しようという企てであると言えます。その企ては協同組合を事業として継続するための「必要悪」として、専従組織(非官僚組織)が発達します。その末に官僚支配に陥らないようにするために、常に組合員の創発的自治的な協同性に立ち戻る「契機」が必要です。

「バナナのパッキングセンターでBGA(バナゴン生産者協会)の人たちと交流会をしたときに、一人ひとり名前とBGAでの役割を自己紹介してくれました。それが何だかとても晴れがましい感じで、みんな自分たちの協同組合に誇りを

り、そのことは地理的距離が数キロメートル(産地でも数キロメートル(民衆交易)でも本質的に変

わりなく、これがフェアトレードと区別した「民衆交易」の定義ではないでしょうか。

日

本の協同組合の創設者、賀川豊彦が1935年に米国で出版した『Brotherhood Economics』(邦題『友愛の政治経済学』)に注目すべき言葉がある。「今日の貧困は物の欠乏によるものではなく、豊富さか

ら生じている。(中略)私たちが欠乏のゆえではなく、過剰のゆえに苦しんでいるのである。(中略)富は、ごく一握りの人ひとの手に集積し、社会の一般大衆は、失業、不安、従属、不信の世界に蹴落とされている。」

これは1929年の世界大恐慌とそれ以降の不況にあえぐ米国各地で賀川が講演した内容を書き記したものである。当時は、500回の講演で述べ100万人の聴衆が集まったほど熱烈な支持を受けた。そして賀川の協同組合づくりがスタートした。



未来は、小さな地域の自立圏構想にある

山本伸司 / やまもと・のぶじ
バルシステム生活協同組合連合会 理事長

さて、現在である。賀川の指摘はそのまま今日の私たちの社会に当てはまる。米国では2008年のリーマンショック、そして2010年からの深刻なEU経済危機へと広がる。世界の経済システムは崩壊の瀬戸際にある。崩壊に直面しているのは金融だけでなく、各国財政、資源争奪と戦争、貧富の格差増大、そして自然破壊と気候変動の危機へと広がり、誰の目にも明らかとなった。問題は、富の配分にある。資源の収奪にある。

金融システムにある。もはや現在のグローバル金融と多国籍企業の暴走は止められない。日本も深刻なコミュニティの崩壊へと追いやられている。もはや先進国といわれる各国でも地域とコミュニティの破壊は深刻である。貧困の増大は深刻である。農村地帯から若者は激減し、伝統的な地域文化が後継者不足で維持できなくなる事態が進んでいる。そして、大都市でも町のコミュニティが維持できなくなってきた。では、私たちはどうこの世界を変えていけるか。

「食、エネルギー、ケアの自給圏」を構築しよう

その未来は、自然と共生した小さな地域の自立圏構想の中にある。2012年は、国連の定める「国際協同組合年」だった。世界各地と連帯して日本各地で各種の協同組合が各種の集会で、今日の危機とそれに立ち向かう方向を話し合っている。その要点は、国際協同組合年実行委員会代表も務めた内橋克人先生の言葉に示されている。「食(E)、エネルギー(E)、ケア(C)の自給圏」の世界的ネットワークの構築である。

FEC自給圏構想は、日本では里山コミュニティという伝統的な農村社会を連想する。しかしそれ

は決して過去へ戻るのではなく、人びとが助け合い協同して新たな地域社会の豊かさや伝統文化の尊重、持続可能なシステムの構築を進めることにある。

この構想は、20世紀型の大量生産・大量消費、高エネルギー生産とグローバルな多国籍企業の拡大とは、逆の方向性を持つ。地域の風土と自然との共生に学ぶ先人たちの知恵を活用し、地域内発的、小規模経済のネットワークを築いていく。さらに先端科学の方向をネイチャーサイエンスとして自然の原理に学ぶ持続可能な共生の科学へと舵を切ることにある。

優しいまなざしの復活と野生の獲得

そして、これらを実現する重要な鍵は「食」と「農」にある。食べることは環境を体内に取り入れること。生活することは、身体操作と自然との対話であり、それらは農にある。農村社会の真の豊かさは、この貨幣経済を超えたコミュニティの豊かさだ。この復活と発展、これは日本国内、アジア各国とも共通した課題となっている。アジアで、世界で民衆が連帯することは、民衆が主人公となって国家主義を超え、金融を先頭とした帝国主義の時代を終わらせることにある。それは、優しいまなざ



パルシステム職員のネグロス島バナナ産地研修。定期的な産地訪問によって、人のつながりによる産直を实践し、「食」を通じた国際交流によって、アジアとの連帯を進めている。

しの復活と野生の獲得にある。食を再び自然的恵みへと還元していくことにある。民衆交易から今後

ネ

グロス島から最初の民衆交易商品「マスコバド糖」を日本に届けたのは26年前。島を襲った砂糖危機が発端だった。当時私は、全国砂糖労働者連盟(NFSW)ネグロス支部で労働者の組織化の仕事をして

砂糖の自由化と多国籍企業の進出

当時と比べると、飢餓や内戦といった問題はすでに解消したが、砂糖労働者が抱える根本的な問題は依然として残っている。現在、オルター・トレード社(ATC)がつながらる生産者ほすでに土地所有裁定証書(LOA)を取得した人びとだが、ネグロス島では、未だ農地改革が進まず、土地なし・低賃金労働・地主の嫌がらせなどで問題を抱える農園労働者が多数いる。それはここ数年、砂糖キビ生産地を訪問するなかであらためて実感したことだ。

さらに、フィリピンの砂糖産業はASEAN自由貿易協定により、2015年には「砂糖の関税5%」という深刻な事態に直面している。政府は、砂糖キビの単一栽培からの多様化を進めると約束しているが、労働者・農民たちは不安を抱えている。すでにミンダナオ島を中心に操業してきたドル

この世界をもっと平等にしよう

アルネル・リガホン / Arnel J. Ligahon
マスコバド糖製糖工場長



社、テルモンテ社は、ネグロス中央部でそれぞれ、バナナ、パイナップルのプランテーションを操業する準備を始めている。2015年に向け、地主と多国籍企業が結託する一方で、農地改革の行方、失業問題など、農園労働者や農民にどのようなリスクが発生し、ネグロスの農業自体どう変わっていくのか、油断を許さない状況にきている。

民衆交易の強み

現在ATCは、日本以外、韓国・欧米諸国にもマスコバド糖を輸出している。

2008年に起きた経済危機によって欧州諸国への輸出量が40%も減少したことがあった。しかし同時期、日本への輸出量は変わらなかったし、韓国への輸出量はむしろ増加した。この違いはなんだったのか? 欧州へはフェアトレード組織を通して、スーパーなどメインストリームの市場に卸しているため、日本や韓国と違って生活協同組合という組織化された消



マスコバド製糖工場で濃縮した砂糖キビの搾り汁を乾燥させる作業。

費者との関係の強さがない。私たちはあの時に、消費者と直接つながるといふ関係を大切にしてきた「民衆交易の強み」をつくづく感じたものだ。

ATCが25年継続できたのも、この関係があったからだ。今、私たちは、韓国の生協とも同様に直接の絆を築き始めている。

アジアの農民とつながる

私たちは今、不公平なグローバル化の中で生きていく。日本やフィリピンという国の垣根がなくなくなり、資本にとって、労働者は商品

のひとつでしかなくなった。フィリピンでも改憲の動きがあり、外国資本が土地や鉱山をも所有できる法律に作り変えようとしている。これ以上多国籍企業が進出してくれば、私たちの社会構造も大きく変わり、労働者や農民にとってはもっと厳しい状況が生まれるだろう。

「民衆交易を通してどのように構造的な不平等を克服するか……」これは、オルター・トレード・ジャパン(ATJ)初代社長の堀田正彦さんが言いつづけていた言葉だ。この間の経験から私自身、民衆交易はひとつの解決の道を示す有効な手段になると考えている。アジアの最

底辺に置かれようとしている農民や労働者が問題を共有し、世界の人びととネットワークを築くことは、新しいオルタナティブを創り出せる大きな可能性になると思う。

今年、ATCは設立25周年を迎えた。その合言葉は、「次の25年につなげ、この世界をもっと平等にしよう」だ。若い世代にも期待したい。皆が情熱を持って働けるように。

(聞き手: 吉澤真満子/APLA事務局長)

03

photo essay
from Thailand

微笑みの国から No.4

平河夏／ひらかわ・なつ
一児の母、タイ・バンコク駐在3年目

地域の人、その人の仕事

ある映画の台詞に「チェーン店ではなく、地元のお店で食事をしていたわ」というのがあった。全国展開のどこにでもある店ではなく、その地域に暮らす人が経営する店を利用する——そんな当たり前のことを、日々の忙しさにまかされてふと忘れてしまうことがある。

タイでは、「この人は何年もこの場所で同じ仕事を続け、これから先もそれは変わらないだろう」と思わせる人たちにたくさん出会う。

俗に言う地位も名誉も権力も、そして大金を得ることもなく、日々の糧のために、やるべき自分の仕事を黙々とこなす。いわゆる「無名びと」だが、そんな彼らを地域の人とはみんな知っている。「服を直してもらおうなら〇〇さんに頼めばいいよ」というように。

「今の自分がないもの」を渴望し、さらに大きくなること、先をめぐすことが悪だなんて言うつもりはないが、自分の地域に根を張り身近な人のために働く。そういう生き方も、ひとつの生あり方なのだ、とこの国で実感した。



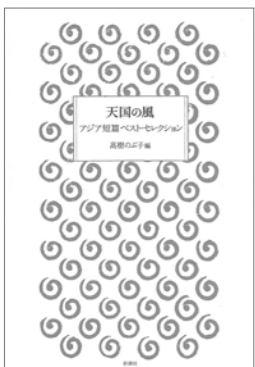
ミシンを踏む男性。

04

アジア現代文学 Asian Contemporary Literature ARE-KORE | 04

『天国の風—アジア短篇ベスト・セレクション』

高樹のぶ子 編、新潮社刊、2011年

秋山真兄／あきやま・なおえ
APLA共同代表

初めて訪問したアジアの国は70年代末の韓国であった。爾来40数年、100回以上はアジアの国を訪問しているだろう。ただ役割上、また自分の性分もあって、訪問している国の大半はフィリピンである。同じところで同じ人びとと出会うというが、それでも人びとは外国人の私と出会うために私の前にいる。もちろん、私という外国人がいることをほとんど意識しない立ち振る舞いや、日常の暮らしの一端を垣間見ることがないわけではない。しかし、それで人びとの毎日のさりげない、あるいは深刻な喜怒哀楽を深いところで触れることができたとはとても言えない。

この本の帯に「知る」よりも「考える」よりも深く、アジアに「浸る」ための短編集」と記されているのを見て、旅人は知り考えることはできるが、人びとの暮らし・思いに浸ることはなかなかできないことを思い知らされていた私は、あらためて小

説の意味と力を思い、また味わうことができた。

このアジア10カ国の10篇の短編集は、作家・高樹のぶ子が各国の作家を訪ね、作品を見出して編集したものである。どの小説にも、個人のあり方とアジアの国々が抱えている社会構造の問題との葛藤があるが、多くはあからさまに表現されずに通奏低音のように流れている。中産階級や上流階級がテーマになっているものでもそれは変わらない。このような内容は受け入れられるのだろうかと思わされる性的描写の激しいタイの女性作家の作品はもとより、静謐な時間が流れているベトナムの表題作『天国の風』であれ、高樹が述べているように、確かにそこには「闘う言葉」が内在されているのである。

フィリピンの作品『アンドロメダ星座まで』は、私が出会う人びとは異なる階層の少年の話であるが、この少年のような内面が、私が出会っている青年たちの内面と重なるのだろうか。おそらく他の国に通い詰めている旅人でも、その国の短編集を読むのと同じような思いをするのではなかろうか。旅人の「悔しさ」と旅人ゆえに「感じる」ことが混在する、何ともいえないひと時を与えてくれる珠玉の短編集である。

旅人の「悔しさ」と旅人ゆえに「感じる」マジマ

01

カカオ キタ
kakaokita

カカオ民衆交易奮闘記

4

津留歴史／つる・あきこ
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員

カカオ豆を発酵箱で掻き混ぜる。発酵まで4〜5日かかり、3日目から毎日1回攪拌して空気を送り込む。

カカオ加工場で働くパプア人たちは、最初は高い塀に囲まれた加工場の中に閉じ込められて息苦しく、戸惑った。でも1カ月、2カ月と働きつづけるようになって、カカオ豆を丹年に発酵・乾燥・選別して、きれいなカカオに仕上がったときの喜びを感じるようになってきた。週に一回日曜日の休み明けに加工場に出勤してくる彼らの顔を見るとホッとする。

先日インターネットでたまたま目にした記事にはっとした。「維新後に司法省顧問に呼ばれたフランス人のブスケは、日本の労働者はちょっと働いたらすぐタバコ休みにする、これでは近代産業を移植するのは無理だと考えた。当時の日本人はまだ、自分が時間の主人だったんですよ。」(朝日新聞2013.08.22 オビニオン生きつらい世を生きる：近代化の意味を問う評論家・渡辺京二さん)

これって、カカオ加工場で働く村の青年たちと同じだ、と思った。勤務時間を午前8時から午後5時までと決めているが、作業が連続して流れない。ちょっと目を離すと座り込んでタバコを吸ったり、携帯電話で音楽を聴いたり……。加工場リーダーの女性は、「ほら、次はこれやれ、あれやれ」と彼らの尻を叩きつづければならない。「座っている時間は給料払わないからね!」と言っても彼らはポカンとしている。労働と賃金の関係がピンとこないらしい。

でも考えてみたらパプアの先住民は数十年前までは豊かな資源に恵まれた森や海で自給自足の生活を営み、時間はすべて自分たちの必要に応じて、自由に使えたのだ。「自分が時間の主人公」——高度な資本主義経済、管理社会にがっちり組み込まれている私たち日本人には手にしたくてもできない贅沢を彼らは享受している。そう考えるとパプアの人たちが羨ましくなる。と同時に、この自由さがインドネシア他地域から続々と流入してくる移民との経済競争に負け続けている理由でもある。

パプア人の時間

02

マイストーリー ジャパン

日本に住む在日外国人たち 【第十回】



恵泉女子園大学にて。

【中国】楊志輝さん／ヤン・ジフイー

聞き手：堀芳枝（恵泉女子園大学教授）

楊さんは1990年に来日し、翌年から早稲田大学の大学院生として国際政治のゼミに入った。以来、20年にわたり日本に滞在し、現在は恵泉女子園大学国際社会学科で、日本と中国の歴史と戦後の日中関係について教えている。

アヘン戦争後に開港した異国情緒あふれるアモイ(福建)に生まれ、改革開放の時代、日本に学ぼうという掛け声の中で育った。父親が日本語に精通し、台湾で暮らす親族もいたことから、幼少の頃より東アジアの国際感覚が自然とそなわり、早稲田大学で日中外交について専門を深めることになった。

最近、中国の研究者たちの間で日本の戦後の市民運動についての関心が高まり、再評価されているようだ。中国でも、日本の市民社会における

楊さんは1990年に来日し、翌年から早稲田大学の大学院生として国際政治のゼミに入った。以来、20年にわたり日本に滞在し、現在は恵泉女子園大学国際社会学科で、日本と中国の歴史と戦後の日中関係について教えている。

アヘン戦争後に開港した異国情緒あふれるアモイ(福建)に生まれ、改革開放の時代、日本に学ぼうという掛け声の中で育った。父親が日本語に精通し、台湾で暮らす親族もいたことから、幼少の頃より東アジアの国際感覚が自然とそなわり、早稲田大学で日中外交について専門を深めることになった。

最近、中国の研究者たちの間で日本の戦後の市民運動についての関心が高まり、再評価されているようだ。中国でも、日本の市民社会における

楊さんは1990年に来日し、翌年から早稲田大学の大学院生として国際政治のゼミに入った。以来、20年にわたり日本に滞在し、現在は恵泉女子園大学国際社会学科で、日本と中国の歴史と戦後の日中関係について教えている。

アヘン戦争後に開港した異国情緒あふれるアモイ(福建)に生まれ、改革開放の時代、日本に学ぼうという掛け声の中で育った。父親が日本語に精通し、台湾で暮らす親族もいたことから、幼少の頃より東アジアの国際感覚が自然とそなわり、早稲田大学で日中外交について専門を深めることになった。

最近、中国の研究者たちの間で日本の戦後の市民運動についての関心が高まり、再評価されているようだ。中国でも、日本の市民社会における

楊さんとの出会いを大切に、日中関係を良くしていきたいな、と思う。また、楊さんは恵泉の中国人の留学生を指導するかわら、中国と日本の架け橋を育成するべく、語学研修やフィールド・スタディにも力を入れている。恵泉から将来、楊さんの思いをつなぐ学生が育ってくれたら嬉しい。

APLA 食堂

Kitchen APLA

02

今日のレシピ **バナナカレー**

レポーター **赤石優衣** / あかいし・ゆい
大久保ふみ / おおくほ・ふみ
 APLA事務局
廣瀬康代 / ひろせ・やすよ
 APLA理事

APLA食堂では、ATJ/APLAで扱っている食材を利用したレシピをご紹介します。手の込んだ料理も素敵ですが、もっと手軽に使っていただけるように、「誰でも簡単に作れる」レシピをお届けします。

おなじみの バナゴンバナナを使った 意外なレシピをご紹介します!

バナナカレー

そのまま食べる以外のバナナの活用法は？ 凍らせてシェイクにしたり、チョコバナナやフルーツポンチなどのデザートがパツと思ひ浮かびます。しかし、それだけではつまらない！ ということで、今回はカレーの具材に。カレーに甘いバナナ？ と思うかもしれませんが、これが意外にも合うのです。ココナッツミルクを加えたようなまろやかな風味が、カレーのスパイスと相まって、普通のカレーが一気にアジアンテイストになりますよ。

【材料】

- 豚ひき肉..... 200g
- 玉ねぎ..... 大1個
- ナス..... 2本
- トマト..... 3個
- バナゴンバナナ..... 1~2本(お好みで)
- カレー粉..... 大さじ6
- 塩・コショウ..... 適宜
- 牛乳または生クリーム..... 45ml
- 水..... 適量



【作り方】

1. 玉ねぎはみじん切り、ナスはヘタを取り1センチ角に切って水にさらしあくを抜く。トマトは湯むきして粗いみじん切りにし、バナナは皮をむいて1センチの輪切りにする。
2. フライパンに油を入れて、玉ねぎを炒める。玉ねぎが透き通ってきたら豚ひき肉を入れて、ほぐしながら色が変わるまでよく炒める。
3. ナス、トマトを加えて炒めたら、トマトから出る水分の具合を見て、水をひたひたに加え、中火で20分煮る。
4. カレー粉、バナナを加え、さらに10分煮る。牛乳(生クリーム)塩・コショウで味を調べてできあがり!

※バナナのカタチを残すか、なくなるように煮込むかはお好みで。



おいしいよ!

● 編集裏話

カレーの試食の日、フィリピンから来日中のバナナ生産者がちょうど事務所に来ていたので、一緒に味見をしてみることに。気になる感想は……おいしい! と好評でした。皆さまぜひお試しを。

今回の雑学

自 然の摂理って理に合っているなあど改めて思うのですが、暖かい地域または時期に穫れる野菜・果物は体を冷やす効果があります。そして熱帯地域でつくられるバナナもまた、そのひとつです。
 しかし干すと体を冷やす効果がなくなるので、これからの寒い時期には干しバナナがおすすめ。干物用のネットに皮をむい

たバナナを入れて、風通しの良い所に2週間位放置すると干しバナナができあがります。見てくれはしわしわで良くないですが、干し柿のように生とはまた違った味が楽しめます。
 また、生のバナナには消化酵素(注)が豊富に含まれているので、消化に負担がかからないため、胃腸の休息時間を増やせるというメリットもあります。

バナナは一年中手に入りますが、日本には四季があるので、季節によって食べ方を変えるのも楽しいかもしれません。
 (注) 体の中で作り出されるタンパク質の一種で、様々な生命活動をスムーズにする働きを担っています。



【参考文献】『からだにうれしいフルーツの便利帳』三輪正幸監修、高橋書店、2012年『朝バナナダイエット』はまち。ぶんか社、2008年

撮っておきアジア

Totteoki ASIA

22

撮影者○押山正紀 / おしやま・まさき
 撮影場所○タイ



- 1 — ヘその緒の木。
 カレン族はタイ北部やミャンマーの山岳地帯に住み、自然を守りながら、生活するための伝統・知恵をたくさん持っている。赤ちゃんのヘその緒は、竹筒に入れ、村の木にくくりつけることで、この木には生霊が宿り、切ってはいけない神聖な木になる。
- 2 — 循環型畑の稲刈り。
 焼畑は森林破壊という政府の政策でカレンの人びとの生き方を凝縮している循環型農業は換金作物栽培に換えられつつあるが、森で生きる伝統を守るために、生物多様性を維持する実践を続けている。4月に焼いた畑で、11月には陸稲を始め、一つの畑で最低50種類ほどの作物を収穫する。畑を焼く際は、大木は腰の高さで切るため、すぐ新芽が出て4、5年で大きな木に成長する。収穫の儀式は畑・火・米の精霊に対して行われる。
- 3 — 子どもたちは自然の花や草で遊ぶ。
- 4 — 農作業のお手伝い。
- 5 — 儀式。
 カレン族は、自分の身体に5つの精霊、そして周囲に32の精霊(例えば、魚、鳥、豚、水牛、ネズミ、バッタなど)が生きものの中に宿っていると

考え、37の精霊が揃うことで幸せで健康に暮らせると信じている。幸せと健康を祈るため招魂儀礼を行い、聖糸を手首に巻き、逃げていかないようにする。頭に聖糸を置くのは、糸のように髪が真っ白になるまで長生きすることを願っているからだ。

(2013年8月撮影)



このコーナーでは皆さまの写真を募集しています。

募集内容○アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA事務局(TEL:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆さまからの応募をお待ちしております!

編集後記

大豆製品を買う時に「遺伝子組み換えでない」という表示をみることが癖になっていたが、「遺伝子組み換え栽培を強要されている」人びとのことを考える想像力はなかった。今回の特集に関連してラテンアメリカから発信されるネット情報に触れ、環境や安全性だけではなく、数百家族単位で家や畑を焼き払われ、土地を奪われる人びとの壮絶な現実を知った。今後この問題は本誌で取り上げていきたい。(大橋)

『APLA食堂』で紹介されたバナナカレー、驚かれた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。バナナカレーと聞いた時は……？ まったく味が想像できませんでしたが、廣瀬さんが作ってくれたカレーを食べてみると、フワーッと南国の風が口に運ばれ、意外なおいしさに、たくさんいただいてしまいました。ココナツミルクが苦手、フィリピンに出張へ行ってもココナツミルク入りの料理やお菓子が食べられないので、時によってはバナナで代用できるかもしれない！ とバナナを使った料理が他にもできるかも、と思いを巡らしました。(吉澤)

今回で連載4回目になるコラム『kakao kita カカオ民衆交易奮闘記』に書かれている《時間》についての話、皆さんはどう読まれたのでしょうか。先日このパプアの仲間たちから届いたカカオをつかったチョコレート作りのワークショップを広島で開催してきました。原料のカカオから手作りするという《手間と時間》を経てできたチョコレートの前に、大人も子どもも関係なく参加者のみなさん全員が目キラキラさせていたのが印象的でした。(野川)

ハリーナ HALINA

2013年11月号 vol.02-no.22
2013年11月1日発行

編集長
大橋成子

編集者
吉澤真満子、野川未央

表紙写真
長倉徳生

デザイン・制作
十年舎

編集・発行
特定非営利活動法人 APLA
(APLA/あぷら: Alternative Peoples' Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

印刷
株式会社セイズ

事務局の動き(2013年8月～10月)	
8月 18日～30日	東ティモールに野川が出張しました。
9月 4日	バナナ募金でバナナを届けている福島県福島市・(学)福島わかば幼稚園、福島隣保館保育所、福島わかば保育園、福島こひつじ幼稚園を赤石が訪問しました。
9月 5日	バナナ募金でバナナを届けている福島県南相馬市・原町聖愛保育園に、バランゴンバナナの生産者と一緒に秋山、赤石が訪問しました。
9月 7日	APLA理事会・評議員会開催。
9月 14日	第7回BMW技術協会基礎セミナーに吉澤が参加しました。
9月 21日	スローマーケット@清瀬したじゅく2013秋に出店しました。
9月 22日	アースティマーケットに出店しました。
9月 24日～10月 3日	東ティモールに野川が出張しました。
9月 25日	グリーンコープ共同体「fromネグロス学習会」で大橋が講演しました。
9月 28日	フォーラム・アソシエの第9回アソシエーション文化祭に出展しました。
10月 1日	パルシステム埼玉平和国際委員会・ピースインターテマグループ・おいしいコーヒーの淹れ方教室に参加しました。
10月 7日	福島県福島市こひつじ幼稚園を訪問し、バナナのワークショップを開催しました。理事の廣瀬、赤石が訪問し、聖セシリア女子短期大学の岩崎淳子先生と卒業生の高橋良子さんにご協力いただきました。
10月 8日	アユス仏教国際協力ネットワーク主催NGO組織強化に関するワークショップに吉澤が参加しました。
10月 8日、9日	「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップ・全国キャラバン2013を広島で開催しました。
10月 11日	ネットワークイベント『STAND UP TAKE ACTION ～貧困のない社会に向けて一歩前へ!』に野川がゲストスピーカーとして参加しました。
10月 12日	武蔵大学第59回公開講座「市民が動かす社会」で吉澤が講演をしました。
10月 20日	土と平和の祭典2013に出店しました。
10月 22日	APLA懇談会開催。
10月 23日	ホントのおいしさ知ってみよう! あぶら料理教室@羽村を開催しました。
10月 23日	さがみ生活クラブ生活協同組合(神奈川)で大橋が講演しました。
10月 24日～28日	フィリピン・ネグロス島へ吉澤が出張しました。
10月 25日～28日	互恵のためのアジア民衆基金(APF)の第4回会員総会に秋山が参加しました。
10月 27日	アースティマーケットに出店しました。

事務局からお知らせ

「福島の子どもたちに届けよう バナナ募金」へ引き続きご協力をお願いいたします。いくつかの保育園、幼稚園からお礼のメッセージが届いています。ホームページでは、写真でお礼の手紙や絵が見られるようになっていますので、ぜひご覧ください。
●2013年8月現在、19施設、約1400人の子どもたちへ届けています。

以下の呼びかけに賛同・参加しました。

- 【緊急署名】これ以上、海を汚さないでください、政府は汚染水を止めることに集中してください、規制委・規制庁は、原発の再稼働審査を中断し、汚染水対策を優先してください

From East Timor [東ティモールより]

アグロフォレストリーの導入に向けて

これまでコーヒーだけに頼らない地域づくりのために様々な取り組みを続けてきましたが、今年度は、アグロフォレストリーの導入に向けて準備を進めています。アグロフォレストリーとは、多様な樹木を植栽し、その中で家畜や農作物を飼育・栽培する農林業の形。持続可能な農林有畜複合農業として、その重要性が認められてきています。

8月末、東ティモールの代表的なミュージシャンであり、環境活動家としても精力的に活動しているエゴ・レモスさんの協力で、エルメラ県のコーヒー生産者グループに対してアグロフォレストリーを紹介するセミナーを開催しました。コーヒーとそのシェードツリーが土地の大半を占めている地域で、自給や地場流通の果実類や新材用の樹木を植栽することで、プランテーション型のコーヒー単一栽培から抜け出し、持続的な農林業の確立をめざすことの大切さをわかりやすく説明してくれたエゴさん。話は経済的側面だけにどまらず、世界的な気候変動の影響なども考えて、森林や水源の保全が今後さらに重要になってくるという問題提起もなされました。



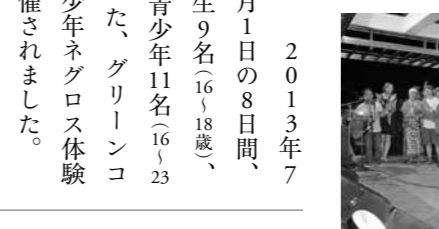
コーヒー畑の様子を観察しながら、コーヒー生産者に対してその場で色々とアドバイスをするエゴさん。

セミナー後は、コーヒー生産者が暮らす地域を訪問して、コーヒーの畑の中や周辺の地形・気候・土壌などの調査も実施しました。どんな種類の樹木が適しているか、どのような形で作物の多様化を進めていけるか、という点を探るため、調査結果を受けて、今

活動しているエゴ・レモスさんの協力で、エルメラ県のコーヒー生産者グループに対してアグロフォレストリーを紹介するセミナーを開催しました。コーヒーとそのシェードツリーが土地の大半を占めている地域で、自給や地場流通の果実類や新材用の樹木を植栽することで、プランテーション型のコーヒー単一栽培から抜け出し、持続的な農林業の確立をめざすことの大切さをわかりやすく説明してくれたエゴさん。話は経済的側面だけにどまらず、世界的な気候変動の影響なども考えて、森林や水源の保全が今後さらに重要になってくるという問題提起もなされました。

From Negros, Philippines [ネグロスより]

グリーンコープ青少年ネグロス体験ツアーを実施!



ATC25周年式典の様子

2013年7月25日～8月1日の8日間、日本の高校生9名(16～18歳)、ネグロスの青少年11名(16～23歳)が参加した、グリーンコープ主催青少年ネグロス体験ツアーが開催されました。

ネグロスからの参加者の中には、学校に行けない、家族が離散したこと、心を傷めるなど様々な問題を抱えている青年たちも多くいましたが、毎日のワークショップを通じて日本とネグロスの青年たちは距離を縮めていき、お互い抱えている問題を何でも話せるまでの友情を築いていきました。自分の素直な感情を表



子どもたちの最高の笑顔!

ら、助言などを受け、コーヒー生産者の中にもやる気が芽生えたようです。(APLA事務局・野川未央)

に出すことができる子どもたちの涙や笑顔もとてもキラキラ輝いて眩しかったです。最後には、私たち引率者が混ざることのできない、みんなが創りだした一体感がそこにはありました。そんな彼女たちの成長していく姿を見ていた私たちスタッフも、五感をフルに使い、多くのことを学びました。青少年ツアーではありますが、参加する子どもたちと同じく

の場にはいた全員が笑顔に。マスコパド糖やバランゴンバナナの輸出を担い、生産者の経済的自立を図るため、日々奮闘しているATC。民衆交易と同様、20年以上も続く生産者と消費者の子どもたちの交流を、この式典で披露できたことは、私たちがただでなく、民衆交易に関わっている全員にとっても意味のあることだったと思います。(APLA事務局・赤石優衣)

ら、助言などを受け、コーヒー生産者の中にもやる気が芽生えたようです。(APLA事務局・野川未央)

に出すことができる子どもたちの涙や笑顔もとてもキラキラ輝いて眩しかったです。最後には、私たち引率者が混ざることのできない、みんなが創りだした一体感がそこにはありました。そんな彼女たちの成長していく姿を見ていた私たちスタッフも、五感をフルに使い、多くのことを学びました。青少年ツアーではありますが、参加する子どもたちと同じく

また、今年度は、オルター・トレード社(ATC)25周年の記念式典がツアーの日程と重なり、そのセレモニーで収穫の感謝を表したハーベストダンスを披露しました。短い練習時間にも関わらず、練習の成果が表れました。素晴らしいパフォーマンスを式典参加者に見てもらうことができ、その場にいた全員が笑顔に。マスコパド糖やバランゴンバナナの輸出を担い、生産者の経済的自立を図るため、日々奮闘しているATC。民衆交易と同様、20年以上も続く生産者と消費者の子どもたちの交流を、この式典で披露できたことは、私たちがただでなく、民衆交易に関わっている全員にとっても意味のあることだったと思います。(APLA事務局・赤石優衣)